編集・発行：©倉敷芸術科学大学図書館（〒712-8505 岡山県倉敷市連島町西之浦2640 TEL.086-440-1181 FAX.086-440-1182）
編集・発行責任者：
館長 生谷吉男
（芸術学部教授）
編集者：
館員 井上弘行
館報は図書館ホームページでも読めます。
http://www.kusa.ac.jp/lib/MAIN.HTML

題号の由来

孔子と弟子たちの言行を収録した『論語』の「子曰、『学而不思則罔。思而不学則殆』」（「先生が言われた、『学んでも考えなければ、はっきり理解できない。考えても学ばなければ、確かなものとならない』」の意）による。
読みは日本語の音読みとした。
初代学長故谷口澄夫先生の筆による。

倉敷美観地区

加計美術館スタート

芸術学部教授 田村鎮男

芸術学部教授
田村鎮男

この度、念願の加計美術館を、加計学園と高梁学園の協力のもとに、開館することになりました。美術館を通して、学園の建学の理念はもとより、芸術・文化の発信基地として、学園の皆様、一般の皆様に大いに利用して頂きたいと願っています。

この美術館は倉敷美観地区の中心にあって、環境はこれ以上ない最高の場所にあります。建物は築30年以上たっていますが、それなりの趣があります。現在では建築規制があって、美観地区に今のような建物を建てる事は出来ません。当面は、必要最小限の改修を行い、加計学園では美術館として、高梁学園では文化財修復関係の実習室としてスタートさせ、2年後には加計学園に一本化して行く計画です。

ところで、「美術館がなぜ必要なのか？」「どういう役割を持っているのか？」「贅沢ではないのか？」と云う疑問を持たれる方もおられると思いますので、一つの考え方を述べておきます。

大原美術館は、昭和初期の大恐慌の折りにもかかわらず、大原孫三郎の強い意志で建てられました。その強い信念と情熱により、大原美術館の価値は高まりこそすれ、廃れることはありません。戦時中も大原美術館のお陰で倉敷は爆撃を免れました。それほど世界中で芸術、文化は大事にされています。

人類の生活を振り返れば、紀元前3万2千年頃、人が洞窟で生活していたときの壁画が残っているように、人が生活をしているところには必ず、今で云う芸術・文化がありました。このことは、人が生きて行くとき、他の動物たちと違って、心に関わる比重が大きく、食べるだけでは生きて行けなかった、心を支える何かが必要であったということを示しています。つまり、自然の配剤により、人が生きるのに必要な要素として、人の心を支える芸術と文化の能力を与えられたと云うことだと思われます。

人間の心身は切り離せるものではありませんが、敢えて云うなら、体は食欲が支え、心は芸術や文化、宗教が支えていると言えるのではないでしょうか。

すなわち、人が「人」として生きて行くとき、芸術が必要不可欠であることが、歴史を通して実証されています。

芸術作品が生まれるには、作者は人生のすべてを賭けます。生命力の強さ、崇高な人間性、尽きぬ向上心、高度な技術、等々、を駆使して大きな精神的エネルギーを生み出すことによって、作者の生き様が魂として作品に宿り、それが見る人の心に共鳴したとき、感動として伝わります。そして、見る人の心に大きな力と勇気と生きる喜びを与えられるのです。

美術館には作者の人生を賭けた作品群が並んでいます。しかし、当然のことながら、美術館に行けば必ず感動できるというものではありません。共鳴し、感動するか、しないかは、見る人それぞれの人生観、価値観、感性の違いがあります。また、その時々の精神状態によっても違います。人生は出会いによって運命が変わりますが、いずれにしても、先ずは、その場に足を運んでみなければ始まりません。

心に何かが足りない時、生きる力を必要とするような時、いい、絵、い、音楽、い、文学、素晴らしいものに出会うことによって、多くの人は癒され、救われてきたように、芸術は心のエネルギーの源であり、栄養源であり、人が生きて行くとき無くてはならないものです。美術館はその宝庫であり、美術・工芸の芸術作品と人々の心の橋渡しをする大事な役目を担っています。

現時点では加計美術館の所蔵作品は僅かしかありません。しかし、それはこれからの諸君たちの自由な発想によって、社会に如何様にでも働きかけられる可能性を秘めていると云うことであります。これからコンセプトをじっくり考えて、社会に役立つ企画を目指します。大きな夢と希望を持っての加計美術館のスタートです。

加計美術館交通案内

「ご案内」

学部通信制サービス

学部通信制が開講しました。

図書館では、学部通信生の皆様に、通学生が受けられるサービスの他に、通信生独自のサービスを開始します。

通信生の方は、自宅学習が基本ですから、図書館もその基本線に沿ったサービスを提供します。

その一例を紹介します。

第1のサービスは、Eメールで本の貸借ができることです。

延長サービスにも応じます。

第2のサービスは、複写サービスです。

本館所蔵の資料を依頼申し出により、複写して手元にお届けします。

必要があれば、他館から取り寄せることもできます。

その他、資料に関することならメールで受付をします。

詳しくは、図書館事務室にお尋ねください。

ＩＴ化への将来展望

図書館規程第１条に、「…教育、研究に必要な図書およびその他の資料を収集し、教職員ならびに学生の利用に供する…」と定められている。

図書館の任務や働きは、ここに集約される。

その中で、図書館に備える資料は、図書、雑誌、視聴覚資料が主である。そのうち、最後のものを除いては、提供媒体は、「紙」が基本である。

その形態からすれば、ＩＴ言葉には出会わない。90年代後半頃から、ワープロで言えば専用機がＰＣにとって代わり、もっとはっきり言えば、Ｗｉｎｄｏｗｓの隆盛を期して、文字・音声・画像は、急速に紙媒体を離れ電子化と共にマルチメディア化されて行く。併せて、「電子図書館」という用語が登場してきた。

本学の図書館では、平成７年の開学当初から目録カードによる管理は行われなかった。

定義はどうあれ、電子図書館ありきであった。

さて、それから８年を経た今日、そのことはどうなのか。

電子図書館という言葉の背景には、情報のディジタル化と通信の位置づけを無くして語ることはできない。これをＩＴ化に結びつけて将来を展望してみたい。

今更に説明するまでもなく、通信の発達は、時間と空間を一気にギュッと圧縮する。さらに、個対個から個対世界人にというとんでもない環境を生み出した。

1．情報のディジタル化
2．アーカイブスの活用
3．サイバーライブラリ支援

これが、「ＩＴ化への将来展望」である。

化への道

最初に挙げるのは、ディジタル化である。「電子」と名のつくものは、すべて対象となる。電子本（CD本）、電子ジャーナル、電子映像（ＤＶＤ）。

昔、写真はカメラでフィルム上に撮像した。いまは、メモリーカードの時代で、これはディジタルである。PCに取り込んで配信すれば、立派なＩＴ化である。

本館には、ディジタル化するにふさわしい古文書はない。

紀要とか、卒業作品とか著作権がクリアされれば、将来的には図書館が取り組む性質となるかも知れない。

いま流行の電子ジャーナルは、今もって未導入である。雑誌の購入経費高騰は、やがては、電子ジャーナルの値段を凌駕するであろう。それを待つことなく、実現の近道は、どうなのだろうか。

幸い、本学は岡山理科大学、吉備国際大学、九州保健福祉大学の関連校である。４者が協力体制のもと、アライアンスに最もふさわしい。

岡山県が、中国地方が、いや中・四国地方の各大学が、一体でコンソーシアムをくむ。

そういうことよりも、はるかに実現の可能性は高いのでなり、約９GBの記憶能力は、やがてTB級の要請を受ける。併せて、メールサーバーの独立も検討課題である。通信制を充実させるには、貸出、複写サービスにおけるメール機能が重視される。著作権法の改正は、郵送から電送への道を開き遠隔利用者の慈雨ともなる。

活への道

翻って、Ｅｌｓｅｖｉｅｒ Ｓｃｉｅｎｃｅ、ｉｎｇｅｎｔａなど、既に有料／無料で提供がある。ＤＢ検索では、ＪＯＩＳ、ＤＩＡＬＯＧがあり、こちらは来館すれば今でも利用可能である。これに限らずＩＴ化には、「来館」は、死語とせねばならない。これは、活用への大きな転換となろう。

産学共同の研究では、パテントも重要な鍵である。ＩＰＤＬ（特許電子図書館）が公開されている。

支への道

サイバーライブラリとは、ネット環境下にある新しい図書館像である。そこでは、遠隔学習が叶い、やがてアーカイブスは蓄積情報となる。ｅ－ｌｅａｒｎｉｎｇである。

卒業生を含めた生涯学習に、大学蓄積の確かな情報をリカレントする。利用者が情報を選択できる環境作りが進む。

図書館のサーバーは、重厚サービスに向けて、指導体制の準備が欠かせない。込み入ったレファレンスにおいても、専用室での必要充分な対応が望まれる。もちろん、そうした指導に当たるには、機器類一式と隠れた時間が補われて、はじめて実現する。

ＩＴ化に備え、資料を収集するだけでなく、情報発信も求められる。これには、オリジナリティがつきものである。立派な機材が揃っても、それを駆使するスタジオがない。いまは、閲覧室の拝借で、来館者から見れば、何事かといぶかる。デジカメの機材充実と共にＩＴ化に欠かせない。

学生の図書館利用を促進するには、ガイダンスが不可欠である。PCが揃い、ネットができ、CDの再生が可能な多目的会議室の用意である。

グループ学習にふさわしく、ネットにいつでも共同で入れる専用ルームも提供したい。

今春のパソコン専用席設置は、こうしたＩＴ化への歩固めとなる。関係者に感謝する。

以上のようにＩＴ化は、これまでの図書館主体から個への転換を図る筋道となる。

最後にＩＴ化への展望には、機構改革が伴う。図書とアーカイブスの分離整理である。

その時、明治以来の呼称、図書館は情報館に脱皮し、本格的なＬ to Ｐ［eltupi:elto p］サービスの時期が到来していることであろう。

図書館道草講座
－本という名の人格－

コロンブスが、航海で前に前に向かって船を進めた。

その結果、海洋をぐるりと回って出発地点に戻った。

スプートニクが、地球の上空高くを周回し宇宙時代が始まった。人類は、38万km彼方の月まで往復した。

科学への絶賛である。このまま、技術を伸ばし、宇宙を真っ直ぐに進んで行くと、我々の銀河を越え、アンドロメダ星雲をも過ぎてやがて暗黒の宇宙に消え、ある日、突然、幾世代か後の地球人に出会うのであろうか。

かつて、コロンブスが地球を一周したように、この宇宙も閉じているのだろうか。

はなしは、始めからとんでもない、空想のロマンに走ったが、図書館で教育、研究に必要な図書、資料の収集ならびに情報活用のサービスに携わっていると、日頃、知らなかった未知の知識に触れることができる。何か新鮮な心境におかれることで、生きている実感をおぼえる。

そのような経験の思いを、一つひとつ取り上げ、皆さんとその悦びを共有したい。

本は「人」である。第１段は、こんな話からしよう。（←）

図書館に期待する夢

コンピュータ化と電子図書館

オンデマンドな図書館を目指して

図書館に配置替えとなり、一番に気がついたことがあります。図書の貸出システムや図書の検索など、随分とコンピュータ化がされ、いま流に言うIT化が進んでいました。

このことにまずは、驚き、それには、今までに多額の経費を投入、構築したご苦労に対し先輩の皆さんに心から敬意を表します。それと同時に、今後に向けて多くの課題が山積していることにも気づきました。

今年より閉館時間を平日午後7時にしましたが、学生サービスに対し、これから多様化する業務において、図書の自動貸出・返却システムがあります。本体のディスプレイと音声によるタッチパネル利用ガイドで誰にも簡単に安心して利用できるものです。高額ですが、早急に検討すべき時が来ているように思います。

次に気になることは、雑誌の扱いです。近年、雑誌の電子ジャーナル化が進み、一次・二次情報のWeb化が急激に進んで来ています。それらを活用できるシステム環境の整備、高度検索エンジンの提供、ネットへの情報発信、ディジタル化へのツール機器整備など、専用のコーナーを設けたいと考えます。

それらを一つひとつ構築するとき、近代的で快適な利用空間が見えて来るように感じます。

さらに、電子化への道を進みますと、マルチメディア視聴覚システムの拡充という課題も浮かんで来ます。

現在のDVDを内容的にも量的にも充実、暫時、新しいものを収集します。これには、音楽用CDや映画なども揃え、それらをオンデマンド呼び出しできる仕組みも構築できたらと構想は広がるばかりです。

ミニスタジオ、キャンパススタジオのようなイメージで夢は膨らみます。（M・H）

電子情報の収集と検索サービス拡大

今日、多くの図書館が抱えている問題は、膨大な資料をどのようにして集めていくかということと、無限に集められ蓄積されてゆく資料の中のどの部分を捨てていくかということである。

電子図書館におけるもっとも困難な課題は、電子化としての情報をどのように集めるかということではないだろうか。電子納本される本についてはよいが、過去の膨大な冊子体の図書、これからも増えつづけるであろう紙による出版物などをどこまで電子化し、導入していくことができるかという問題は深刻である。

電子図書館における貸し出し、返却業務について考えると、貸し出すということは記憶装置の中の情報を電子コピーして送ることであり、同時に何人にでも貸し出しが可能である。そして原本は記憶装置の中にずっと存在しているのであるから、返却ということをしてもらう必要がない。

これからの図書館に与えられる使命は、図書館利用者、あるいはネットワークを通じて情報を探す人に対する参考業務、相談業務を強化していくことではないだろうか。

つまり、現在図書館が収蔵している図書資料だけでなく、場合によっては電子出版センターが扱っているもの、出版社から買うことのできるもの、さらに国や地方公共団体、その他色々の機関や企業などが出す諸情報など、広い範囲で情報の所在を調べて利用者の質問に答える。また、それを提供するサービスなどが重要となり、検索代行業務といった色彩が濃くなって行くことであろう。（K・A）

よろしく

'02.4 着任
みなさんの
お手伝いをします

図書館事務室長代理
松葉久樹

「人生を左右」

若者が本を読まなくなったと言われて久しい。

本についての話題や論議にはメッタに出会わない。個室にテレビ、オーディオ、パソコン等を備え、インターネット、メールの交信に明け暮れ、活字離れが顕著になったと言わざるを得ない。中身の良い本当に優れた1冊に出くわすことにより、その人の進路を決定した話はよく聞く。そのくらい本は、大切なものです。

これから皆さんが、生活する20歳前後の4年間という時は、30歳代や40歳代で過ごす10年、20年分に匹敵する貴重な時間です。

在学中、1冊でもよい。また、どんな本でもかまいません。将来何かの機会（就職試験でも、恋人にでも）に力説できる本に出会えたら、皆さんが本学において4年間を有意義に過ごした学生生活の証になることでしょう。

「図書館を大いに利用してください」。

言いたいのは、これです。

目的もなくぶらりと図書館を歩いたとき、「こんな本があったんだ！」と偶然面白い本をみつけた喜びは、他の何事にもかえがたいものです。

まず、図書館の中を好奇心で探検、これをお薦めします。

図書館事務室課長
木村清則

以前に私は、岡山理科大学図書館で10年間、他部署に7年間の在職を経て、平成14年春、こちらの大学図書館にまいりました。

私学図書館にふさわしい特色を出せるよう他館との相互協力、教育・研究支援を目指し、日々、努力したいと思っています。

髭の男、よろしく。

図書館事務室
渡邊さよ

新顔の渡邊です。

「ひょっとしてあの目つき悪い人？」と思っている貴方！図書館の使い方が間違っていますよ。

「図書館では静かに」は、最低限のマナー。

個人的に「お静かに」キャンペーン実施中なので、ご協力よろしくお願いします。

私の眉間の皺のためにも是非！（苦笑）

因みに静かな時は笑顔です。

㈠本には、わたしたちの姿になぞらえた色々な呼び名がある。図書館に来る前までは、こんな知識は、まったくない。

「のど」「こぐち」「はな」「みみ」「せ」「あたま」「みぞ」などだ。

どこか人の「カオ」を思わせる。

「かお」と言った場合、そのイメージ化を狙って、企業のカオとか大学のカオとかのように面を表す。本にもカオとは、将にひとのようだ。

さらには、柱もあり天地もある。書棚に、カオを上に立てても倒れない理だ。

「のど」？「こぐち」？などと、その部位を一冊の本に照らし合わせ探っていると、擬人化にエンパシィが起こり強い親しみが湧いてくる。活字を追うことも大事であるが、そこには紙の束ねと雖も人格が見え隠れする。図示する余白もなく文字だけでの説明では分かり難い。『図書館用語集』に載っている。じっくりと、視線を向けていると、愛着も生まれ一層、大事にしようとの思いがつのる。

貸借に応じていると、無惨にも引き裂かれて戻って来る姿をみて、ひと（本）の寿命をもてはやしたと、公憤せずにはいられない。

擬人化の根元には、そんな力もある。本から得るものは、読むことに合わせて、こうした効能もある。

八犬伝熱

滝沢馬琴『南総里見八犬伝』

「青春の一書」と言われて迷うのだが、小学校の高学年から二十代前半まで（この時期のどこかには、私の「青春」もひっかかるだろう）『南総里見八犬伝』に凝っていた。

城主のたわむれの約束から犬と結婚することになった姫君が、自刃して、その腹から仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌、八つの文字のある八つの玉が飛び散る。やがてその玉を持つ八人の「犬士」（いずれも姓に犬塚、犬飼、犬村など犬の字がつき、体に牡丹の花のかたちの痣があり、自分の玉の文字が表す長所や能力を備える）が現われ、めぐり遇いや別れをくり返しながら、力を合せて悪と戦う。悪女の怨霊、盗まれた名刀、人に化けた大山猫、女装する美少年…。江戸時代に書かれた伝奇小説だが、まるでコンピューター・ゲームのような設定である。登場人物は、善悪はっきり定型。世界には隠された法則があり、運命に結びつけられたスーパー・ヒーローたちが、ゴールへ向かう冒険をつづける。

芸術学部助教授　森田　亜紀

登場人物の来歴や特徴、相互関係を暗記する一方、その世界の隠れた構造を解読することに、私は熱中した。

小学生時代に手にしたのは、こども向けの本だったので、細部が省かれたり、書き変えられて簡単にされたりしている。リライトする人が違えば、内容が違う。いったい、本当は、どうなのだろう。自分の本や図書室の本、何冊ものをあれこれ読み比べ読みあわせながら、「本物の八犬伝」を推測した。

中学に入ってからも、手に入らない全体を求めて八犬伝への執着がつづいた。国語で古文を習うころ、角川書店古典文学鑑賞講座の「馬琴」を見つけ、主要場面だけだが馬琴の原文が読めた。こども向きでないと省かれていたらしいエロチック・グロテスクな場面も載っていて「ああ、そうだったのか」と解ける謎もあった。解説で全体がほぼ把握できた。それからまもなく岩波文庫の『南総里見八犬伝』が復刊され（これは私の八犬伝狂いを知る同級生の男の子が、見つけて買ってきてくれた）、それをじっくり読むことになる。

一旦おさまっていた八犬伝熱は、文学部の学生時代に再発した。国文の演習の時間に八犬伝が取り上げられたのだ。岩波文庫全十巻を毎週一冊ずつ、毎回のレポートに自分の解読を書いて出すのが、ゲームをしているようで楽しかった。その当時は、トールキンの『指輪物語』やル＝グインの『ゲド戦記』といった海外の別世界ファンタジーがある。完結した別世界の構築という観点から八犬伝を再評価すべきだと、周囲に言って回った。

今から思えば、私が八犬伝を愛読したのは、個人の内面とか人間の心理が幅をきかす近代文学からの息抜き、というところがある。それはたぶん、思春期の自意識の泥沼からの息抜きでもあったろう。とすればやはり、『南総里見八犬伝』は、私の「青春の一書」と言えるのかもしれない。

近隣図書館訪問記

くらしき作陽大学附属図書館

レポーター　芸術研究科
芸術制作表現専攻　瀬納　匡美

くらしき作陽大学の図書館は、機能美にあふれた美しい建物だった。まず入口ホールの展示物と大きな窓ガラスにスプレーで描かれたディスプレーに迎えられて少々おどろいた。この大学には音楽学部と食文化学部がある。学生図書委員会主催・図書館共催で両学部共通のテーマを研究・展示・発表する企画展を昨年から実施している。「高齢者の心と健康～『わかる』ことから始めよう～」というのが今年のテーマで、介護食や音楽療法等が研究・展示されていた。図書館の資料や情報を駆使した研究は、学部の壁を超えた交流の場となっている。又大学祭を含む日時の設定で地域の人々とのコミュニケーションも図れて文化の伝達にも貢献している。

大学図書館の果たす役割
音楽療法の歴史
文字を持たない時代…

地下一階、地上二階の図書館は、十三万冊の本と一万点以上の視聴覚関係の資料を所蔵している。加えて完備された検索システムと行き届いたレファレンスサービスは、何より利用者にとってうれしいことである。視聴覚関係の資料は、各種のプレーヤーやビデオデッキ等が設置されたオーディオルームで視聴することが出来る。又十人程度で利用できるグループ視聴室が二つある。ここではオーディオルームの機器に加えて八ミリビデオデッキ、デジタルオーディオテープデッキ、光学式レコードプレーヤー等が装備されていてグループ研究が出来る。

音楽学部のある大学の図書館の特徴としては、譜本を大量に所蔵していることである。訪問中にも楽曲の譜本を検索する複数の学生さんに出会った。他に貴重図書・哲学・歴史・特殊文庫等は、閉架書庫に収蔵されている。一階中央の階段を上ると開架式の書架に医学・工学・家政学・産業・芸術・スポーツ・文学…などが整然と分類されて並んでいる。

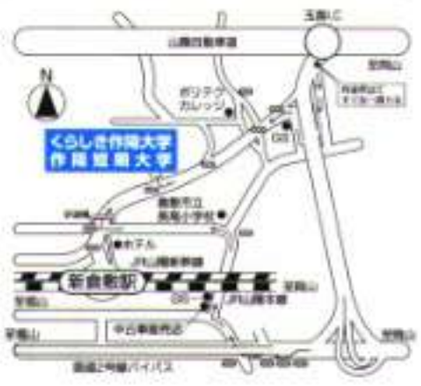
百八十四の閲覧座席が、窓際に並び外光を取り込んだ洒落た設計になっている。自然の緑が残る丘にかこまれたこの座席は、ひと時の安らぎとともに書架の中の一冊と対話するのに申し分のない舞台となっている。

図書館では、毎年新入生を対象に利用システムの手ほどきをしている。十人ほどのグループで行うため二ヶ月位かかるそうだが、利用しやすい図書館にするための取り組みには、館の姿勢がよく現れている。又図書館が発行している館報に『りちぇるかーれ』がある。「ラテン語で探索するという意」だそうである。内容にも具体的に調べる方法（インターネットや百科事典…）や楽しさ、入手した情報の見分け方や活用の仕方の一端まで掲載されている。調べてみよう！図書館に行ってみよう！という気持ちになってくる。

図書館の職員は「本の番人」ではない。特に大学図書館では「教育補助員」の役割も担っている。この自覚を持って運営されている館内は活気に満ちていた。

図書館の値打ちは本の冊数では計れないことを実感した。

くらしき作陽大学附属図書館
案内図



書籍の窓

最近、浅田次郎の小説のファンになった。きっかけは友人が紹介してくれた『蒼穹の昴』（講談社）という本だ。上下2巻で、各々かなり厚かったが、「帯」のコピーに書いてあるように、「泣きながら一気読み」してしまった。ストーリーは中国・清朝末期、貧しさ故に自ら宦官となって宮廷に仕えた少年と、その友人で、宮廷を内部から改革しようとするエリート青年官僚の物語だ。物語は、多量の資料を駆使して、ストーリー、登場人物共に、かなり実在の人物に近いものになっているので、「歴史小説」のジャンルに入ると言えよう。ただ、浅田次郎の小説はみんなそうなのだが、登場人物が皆「良い人」ばっかりになってしまうのだ。それと「そんな奴いるわけないだろー」と思わず言ってしまいたくなるスーパー・チャイルド（ここでは宦官の少年）が登場する。しかしこれが泣かせるのだ。それは力弱いけれど、決して周囲の状況に押しつぶされる事なく、けなげで、聡明で、溢れるほどの思いやりをもって運命を切り開いて行く少年なのだ。これが浅田次郎の「泣かせのテクニック」で、彼のほとんどの小説にはこのパターンの人物が登場する。それともう一つ必ず登場するのが、こういうけなげな少年を優しく励ます年寄り、もしくはその幽霊である。浅田次郎のいくつかの作品を読むと、大体同じパターンになっているが、それでも思わず涙ぐんでしまう。『蒼穹の昴』は特に印象に残ったので取り上げました。

芸術学部教授　大熊治生

ナイトサイエンス

本を読まない学生が増えているという。しかし、人もあまり楽をしていると根源的な動物の「感」のようなものを失ってしまう。私がインパクトを受けた本とこの感にまつわる話を紹介する。

まずは、「ケミカルアブストラクト」。本がない時代、先人はこれだけをヒントに各種の薬品を合成した。CD―ROMがあっても、頁をくって1つずつ書き写すのがよい。ダーウィンの「ザ　アースウォーム」も面白い。彼の少年の頃からのテーマを死の直前にまとめた本だが、同じ版権で150年以上売れ続けているというのもすごい。

ところで、科学系の発表論文には「インパクトファクター」なるものがある。「サイエンスウォッチ」にはその世界ランクが公表されるが、これは米国ISIがその年に最も多く引用された論文（ホットペーパー）から計算した自己評価ならぬ他者評価のインターナショナル版である。

ある会議で聞いた村上和雄先生（血圧に関係する遺伝子配列を決定した学者）の話も納得するものがあった。それは、我々が普段やっている研究のほとんどは記憶と関係した「デイサイエンス」だが、ちょっとしたヒラメキや新しい発見といった一種の感の世界は夜寝ている時の「ナイトサイエンス」だというもの。

私はちょっと一杯やっている時のミッドナイトサイエンスというのもあるように思うが、この話は『生命の暗号』（サンマーク出版、'02）にまとめられている。

産業科学技術学部　教授　須見洋行

幼かった頃

「まァ…」とちょっと息をのむ気配が言葉になって
「子供でも分かるのねェ」
見上げると何かのついでに立ち寄った叔母の顔があって頭の中がカッと熱くなった涙を見られた口惜しさ情けなさ　卓袱台の上にはウィーダの『フランダースの犬』ルーベンスの絵の前でネルロ少年が愛犬と共に凍死しようとしている幼い子供は大人の無神経を憎んだ

貧しくて　『フランダース』も含め　たいていは借りる他なく　内容も難易の程度も考える余裕はなかった　昔は総フリガナの本が多かったから分からなくとも読めた（？）のである　『坊ちゃん』『鉄仮面』『のらくろ（漫画）』『落語全集』『海底二万哩』『忠臣蔵（講談）』『ロビンフッド』『吾輩は猫である』『巌窟王』『西遊記』等等等　不思議なのは　若死した父が残した　中里介山の大作『大菩薩峠』（現在ちくま文庫20冊）を通読したことで　小学生には無理だったはずだが　机龍之介は無論　盗賊七兵衛やお銀さまの姿がいつまでも残った早熟というより家庭環境に問題があると　子供は何かに例えば読書にかまけて精神の安定を求める　ということなのだろう

読書が何かの役に立つと決まったものでもないが　本が溢れているのに　夢中になる対象が何もないとしたら　年齢にかかわらずもったいない限りだと　これは心底からそう思う　涙を見られて怒った子は　ある意味では幸せであった

国際教養学部教授　山本健一

「マナーは圏（とりょかん）につきもの」

マナーは、個人だけの場合には、問題になり難い。集団の場に出ると、あれこれ要求されだす。皆さんは、マナーについてどう思いますか。「まぁーナッ！」てな調子でしょうか。

人が多くなるところでは、秩序が必要です。一定の行動規範が必要です。これが、マナーです。

本来のあるべき振る舞いで共通認識外のことをすると、マナー違反を問われます。

公共の場では、煙草の吸い殻、ジュースの空き缶等、ポイ捨てはいけません。授業中のお喋り、携帯電話も同じだ。人間的に未熟だと、注意をされて、キレる。

集団の場と言えば、図書館も同様。閲覧、学習、調査など精神的活動の場であり、それ以外は、マナー違反となります。文化の違いがあれば、行動様式にそのすれ違いを生み出します。それを超えて、共通認識を育む。マナーを守るとは、そういうことでもあるのです。図書館においては、特にそう言えるのです。

学生諸君が、学窓に席をおいている中は、マナー違反もそう厳しくは、問われない。

実社会では、人間としての責任、社会人としてのマナーに対する素養が問われます。就職活動にも関わることです。

本は、読んで理解し、抱懐だけでなく実践してこそ意味をなす。在学の今、関係書を何冊か重ねて読む。その一冊、悦びが湧けば、しめたものです。

『決定版　新社会人マナー集』ゴマブックス、00年。

倉敷芸科大学生諸君！

直木賞作家　出久根達郎（でくねたつろう）

読書リスト

大学ノートが数百冊である。米寿者が、小学校時代から記しているという、「読書リスト」であった。読書感想文ではない。

小中学校時代、読書感想文なるものを書かされ、それで本が嫌いになった知人が、何人もいる。文章を読むのが大好きだったのに文章を書くことを強要されたため、読書が勉強のように苦痛になってしまったのだ。

読書は自由なもので、読み方を指図するものではない。寝ころがって読もうが、入浴しながら本を開こうが（友人にいる）、勝手である。自由だから、楽しいといえる。

こう読まなくてはだめ、ああ読んだらいけない、と人を指導するものではないし、また従う必要もない。

と言いながら、次のような話をするのは、いささかやましいのだが、決して押しつけるわけではない。興味があるようでしたら、試しにどうぞ、という紹介である。

八十八歳のかたの米寿（米という字を分解すると、この年になる）の祝宴で、珍しい物が出席者に披露された。

読んだ本の名と、著者と、発行年、発行所と定価、それに読了した年月日が、記してある。日記がわりに、忘れないで付けていたという。

何の役に立つか、というと、別に、何の役に立つわけではない。八十八年、元気に生きてきたご当人が、時々ノートをめくって、へえ、あの頃こんな本に夢中になっていたのか、となつかしく思いだす、その程度の役割りで、他人には無用の長物である。それでいいのである。読み終った本の記憶は残らない。わずかにノートの一行が、思いださせてくれる。再読したくなれば、この一行を手がかりに探すことができる。

自分がどのような本を読んできたか、のちのち知ることは、自分という人間の形成過程を見るようで楽しい、と米寿者が語っていた。

図書館 忙々日誌

02

3月▽23　学位記授与式

4月▽1　人事異動、（出）藤得博貴、谷本康子（入）松葉久樹、木村清則、渡邊さよ▽**5**　入学宣誓式▽**8**　新入生オリエンテーション▽**9**　時間外開館サービス19時迄延長▽**25～26**　第50回中国・四国地区大学図書館協議会総会出席（生谷館長、松葉室長代理）

5月▽10　第1回図書館ミーティング（以後月1回開催）▽**11**　スクーリング開館（以後該当日開館）▽**23**　岡山県大学図書館協議会第15回研修委員会出席（末吉館員）

6月▽14　私立大学図書館協会02年度西地区部会総会出席（生谷館長、松葉室長代理）▽**19**　第1回図書委員会▽**21**　岡山県大学図書館協議会平成14年度第1回総会出席（松葉室長代理、木村課長）▽**24**　平成14年度岡山県図書館協会総会出席（松葉室長代理）

7月▽4　リメディオセミナー出席（井上課長、近藤館員）

8月▽28～30　日本私立大学図書館司書主務者研修会出席（木村課長）、平成14年度図書館等職員著作権実務講習会出席（渡邊館員）

9月▽4～6　第63回私立大学図書館協会総会出席（松葉室長代理）、第32回私立大学図書館協会中国・四国地区研究会出席（近藤館員）

10月▽3　倉敷市立短期大学付属図書館司書矢吹、松井両氏本学図書館見学研修▽**4**　第2回図書委員会▽**10**　平成14年度図書館業務講習会出席（松葉室長代理）▽**15**　平成14年度第1回岡山県電子図書館研修会出席（井上課長、近藤館員）▽**23～25**　第43回中国四国地区大学図書館研究集会出席（井上課長）

11月▽12　平成14年度岡山県大学図書館協議会第1回研修会出席（末吉館員）▽**27**　くらしき作陽大学附属図書館取材訪問（井上課長、瀬納匡美芸術研究科芸術制作表現専攻1年）

12月▽9　平成14年度第2回岡山県電子図書館研修会出席（松葉室長代理）

「図書寄贈者（個人）」

図書の寄贈を受けました。厚くお礼申し上げます。

斉藤貞造　山嵜宏暉
村上哲英　黒田正博
生谷吉男　村津和正
倉田卓次　谷村泰成
村上良子　宋　湘平
井上肇　村上直樹
田中　薫　川嶋園子
西田小百合　佐藤恒夫
高橋秀夫　武智秀夫

（右敬称・書名略、寄贈順、お名前のみにさせていただきました）

天牛愚見

IT化への将来展望から

愚見一つ

これを聞いて大学の図書館内から、IT化社会での図書館は、どうなのかと考えてみた。

近年の図書館は、日々、社会背景の変化と共に進化している。その中で最も進んでいるのが、資料のディジタル化ではないかと思われる。今では、電子ジャーナル・オンラインジャーナルといった学術雑誌の媒体のディジタル化が一般化し、研究者は、研究室に居ながら、図書館の閉館時間を気にする事なく24時間、自由な時間に即急の文献を見る事ができる。

また、WWWのブラウザで画像情報を見る事ができ、情報量も増し多岐多様化して来ている。さらに、二次資料についてもCD-ROM化が進み、電子化されている。これらは、図書館側としては、学術雑誌等のスペースが少なくて済み、蔵書管理も容易になるといった良い点もある。

図書館は、書誌ユーティリティ（オンライン協同目録作成システム）により、目録作成作業の効率向上、他館の蔵書の容易な確認から図書館相互貸借（ILL）の方面も進んでいる。情報検索については、代表的なChemical Abstracts・JOIS等の外部データベースにより、利用者のニーズに対しサービスの向上となっているのが現状である。

以上の事から、アナログからディジタル化により、図書館自体がIT化により変貌し、情報処理センター的機能を果たしているのではないか。現在では、「図書館」の名称ではなく、学習支援センターなどと変更している機関も数多い。しかし、その反面、著作権・ディジタル化された資料の管理・IT環境のメンテナンス問題などの発生も事実である。

図書館は、冒頭にも述べた様に、時代と共に進化している。それは、利用者のニーズに対応する必要性があり、そのためには、図書館員も資料の知識のみならず、サーチャー的存在としての器量も要求される。その事はIT化により、図書館員の業務の変化への対応が、余儀無くされているということでもある。

しかし、一方では、昔の図書館の様に、コンピュータに囲まれるのではなく、本に囲まれた心和む空間が良いとの声も聞かれる。結局、ただ単にIT化社会に流されるのではなく、人として、心のゆとり・歴史・伝統・文化を残す図書館の、本来の姿も決して忘れてはならないのではないかとも言える。

新しきを探り、古きを尋ねる。本と共に温故知新である。